リグロス開発　大学の使命　研究生活の思いを語る

歯周再生の世界標準に

新春インタビュー

大阪大学大学院歯学研究科 歯周病分子病態学口腔治療学教室 村上伸也教授

世界初の歯周組織再生剤「リグロス®」の発売・保険収載から1年余り。開発に携わり歯周治療に新たな一歩を切り開いた大阪大学の村上伸也教授に保険収載の意義や研究生活について聞いた。

むらかみ・しんや／1959年生まれ、大阪府出身。84年、大阪大学歯学部卒業、大阪大学大学院歯学研究科、米国国立衛生研究所（NIH）研究員、大阪大学歯学部附属病院講師、大阪大学大学院歯学研究科助教授を経て、現職。16年４月に大阪大学歯学部附属病院病院長に就任した。「患者の苦しさに思いを巡らせる上で欠かせない」と、今も診察の現場に立つ。座右の銘はないが、学生には「一生懸命やっていればだれかが見てくれている。期待した結果が得られなくても後になって学びにつながる」と話すことも。

人類最大の感染症 歯周病に挑む

保険収載目指す

メーカーによれば、リグロスは2017年11月末現在、全国で約1万人の患者に投与され、全国の約2000、大阪府では約230の医療機関が購入。出荷数・購入歯科医院数とも増加を続ける。村上教授は各地で精力的に講師を務める。

「リグロスによって開業医の歯周病治療への取り組み方が、もう一歩踏み込んだものへと変わろうとしている雰囲気を感じています。例えていえば棒高跳びで5㍍飛べる先生が7㍍に挑戦することを後押しするような役割がリグロスには期待されています。普及を進めながら、現場の先生方のフィードバックで〝育薬〟していただきたい」

歯周組織再生をめぐっては、GTR法、エムドゲインなど再生を誘導する「医療機器」が存在しているが、自費のものも多い。新製品の保険収載を目指すかどうかの最終判断はメーカー次第といわれている。

「歯周病は誰もが罹る病気だからこそ、多くの患者が使えるよう、実用化・販売にあたって当初から保険で使ってもらえることを訴え続けてきました。日本、世界の歯周再生治療の標準になればと期待しています」

「リグロス®」は細胞の増殖・分化を調節するタンパク質の一種「bFGF」を有効成分とする。写真＝科研製薬株式会社提供

高い安全性必要

01年に治験を開始し、販売承認を得るまでに16年。基礎研究を含めれば四半世紀を要した。成長因子「サイトカイン」を用いた組織再生を促す薬の研究は、医科領域でも前例が存在しない中での挑戦だったという。

「自分たちで一から治験の判定基準を設定しなければならないなど困難がいくつもありました。歯周病は命に直結する病気ではないため、高い副作用は許されません。より安全性を担保するために慎重な開発になりました。25年以上のプロジェクトに耐えられたのは研究の初期段階から力のある成長因子だという手ごたえがあったからです」

点が線になる

研究者になったのは偶然の導きだったという。材料に関する研究が歯科医療をけん引し、生物学的視点で疾病を理解しようとする比重は高くない時代だった。院生時代に岡田宏教授の薦めで医学部で免疫の研究に携わり、その後、濱岡利之教授の薦めで米国の国立ガン研究所の免疫部門に留学の機会を得る。

「身内に歯科関係者もいなかったので、よくわからず歯学部に入学し、いずれは開業すると思っていました。留学も経験の一つになればというぐらいで渡米したんですが、歯周病を見つめ直すきっかけになりました。感染症である歯周病は、炎症や免疫といった生物学的な深い理解がなければ戦えないなと」

そのころ歯科界では、歯周病の進行を止めることから一歩進み、回復を目指す歯周再生療法の研究が黎明期を迎えていた。

「基礎生物学的なキャリアが、阪大に戻ってからの歯周組織再生剤の開発で生かされたと思います。偶然に思えた経験が結果的に線でつながったのかもしれません」

基礎研究の価値

口腔治療学教室を指導する立場にある。研究に結果が求められる風潮が強まる中、バランス感覚も必要だ。

「基礎研究の価値は今までにないステップに踏み出す時に意味を持つと思っています。研究結果がまっすぐに治療（成果）に向かわなくても、ある病気をとことん理解したくて調べることが大切。未知の克服がなければ、新しい治療・診断法は得られないのだから。院生には『なんだろうと思ったら調べてみればいい』と言っています」

大学と開業医

歯科医療は地域の開業医によってその多くが担われている。近年、病診連携がホットなキーワードだ。大学人としてどう見ているのか。

「阪大からよそへ紹介はできないのだから最後の砦でなければなりません。もう一つは、大学はエビデンスを発信し、開業医の先生方はエビデンスを吸収し現場で実践される。互いの役割をリスペクトしあえればと思います」

リグロスは中度の歯周病患者の回復を目指した。いま、重度の歯周病患者に向けた再生療法の開発を進める。人体の脂肪組織の中に眠っている幹細胞を使ったプロジェクトを大阪大学医学部などと共同で取り組んでいる。

「いつか、地域の診療所に幹細胞が届く。そんな未来がやってくるかもしれません」

人類の誕生以来、史上最大の感染症である歯周病との戦いは終わらない。

村上教授の近著をプレゼント

『歯周病なんか怖くない』

村上研究室のメンバーが一般向けに執筆。はがきで協会まで。応募締め切りは1月25日。抽選で5人に。

3月度生涯研修講座

「FGF―2製剤による歯周組織再生誘導―新規歯周組織再生剤リグロス®の薬理作用と適応」（仮題）

日時　3月11日（日）午前10時～午後1時
会場　M&Dホール　定員　100人
講師　村上伸也氏
会費　会員3千円、未入会者1万円

1月度生涯研修抄録

医院で取り組む妊産婦の歯科治療

～マイナス１歳からの〝健口支援〟のすすめ～

滝川雅之（岡山市開業、岡山大学歯学部臨床講師）

かけがえのない生命を宿した妊婦は、我が子の誕生を待つ至福の喜びを感じる一方で、身体の大きな変化に戸惑い、精神的にも不安定になりやすい心理状態にある。また、歯科医師も妊婦歯科治療の経験が少ない場合には、妊婦患者にどう対処すべきか悩み、X線撮影や局所麻酔、薬剤投与などによる胎児への悪影響を懸念するあまり、歯科治療を躊躇してしまうことも多いのが現状である。

しかしながら、妊娠期は女性のライフステージの中でも、う蝕、歯周病あるいは妊娠性エプーリスなど、様々な口腔疾患の発症リスクが高まる時期であると言える。さらには、妊婦の歯周炎は早産・低体重児出産、妊娠糖尿病ならびに妊娠高血圧症候群となる危険性が高まることが報告されており、元気な赤ちゃんの出産をサポートするうえでも、妊婦に対する適切な歯科治療の実践が必要となる。一方、う蝕原因菌は家族、特に母親の唾液を介して子どもに伝播する（母子伝播）ことが多いため、生まれくる子どものう蝕予防は、妊娠期の〝マイナス1歳〟からスタートすることが、う蝕原因菌の母子伝播予防の面から最も理想的で効果的であると言える。

妊婦に対し安心・安全かつ適切な歯科治療を行うことで信頼関係を築くことが出来れば、出産後にも母子さらには家族全員の歯科受診・定期健診へと繋がることが期待できる。すなわち、妊婦歯科治療は未来を拓く理想的な歯科治療のスタートとなると言える。

今回の講演では、歯科医師ならびにスタッフの皆様に、自信を持って適切な妊産婦に対する歯科治療ならびに禁煙支援を実践していただくためのポイントについて、様々な症例を通して解説したい。

日時　1月28日（日）午前10時～午後1時
会場　M&Dホール（保険医会館東隣り）
会費　会員3千円、未入会者1万円
定員　100人